

「一本気な、ごつごつしたドキュメンタリー映画に出あった。
人は何のために生きるのか、戦争とは何か、人間とは何かを考え
させられる」(2/26付朝日新聞「天声人語」より)

- キネマ旬報ベスト10第1位!
- 毎日映画コンクールグランプリ!
(「記録文化映画」部門)

兵隊が次々と私を飛び越えていった

夏空は青く、この世界は燃えている

写真を撮ることをめざりめた私は、地面の上にあおむけに寝ころんだ

私ほくたくたに疲れてしまった

SAWADA

SAWADA

五十嵐 匠 監督作品
青森からベトナムへ

ピュリッツァー賞カメラマン沢田教一の生と死

(声) 沢田教一……根津甚八

上映協力 全日本写真材料商組合連合会



芸術文化振興基金助成事業

1986年/スタンダード/35mm/カラー/ドキュメンタリー/115分

制作・小泉修吉
撮影・堀田泰寛
撮影助手・秋葉清功
録音・中山隆匡
音楽・寺嶋民哉

制作 三みちのく銀行
制作担当・グループ現代

配給
グループ現代



脚本・貝原浩

サワダ

SAWADA

青森からベトナムへ
ビュリツツアー賞カメラマン沢田教一の生と死

■愚直...という五十嵐監督に怒られるかもしれないが、かつてドキュメンタリーをつくらせていた人間としては、あえて映像的、そして映画構成上のテクニック、いってみれば形容詞の類を排除して、野球でいえば直球一本槍で、カメラマン沢田教一の死までの軌跡をひたすら追った映画に強烈な新鮮さを感じた。



■ベトナム戦争は、最前線の兵士たちの非道な行為や、そこで必死に逃げまどう民衆を撮影するという、戦争報道としてはかつてないことができた異例の戦場であった。多くのカメラマンたちがそこで進んで危険

に身を挺して報道に当たったことが、ベトナム反戦の気運を生み出すのに大きく貢献している。沢田教一はその重要なひとりである。

この映画は、この稀な機会に全身でのめり込んで短い生涯を完全燃焼して終えたひとりの男の人生を描いている。その生と死。職業における技術と人間性と野心あるいは使命感。そして記録とは何かという問題。これはドキュメントとは何かということについてのドキュメンタリーでもある。

形容詞の類は排除しているが、戦争の最前線へ、最前線へ出ていく人間沢田の生き様は見事に浮き上がってくる。何よりも、沢田の先輩や同僚たち、約40人の世界的ジャーナリストの証言で、沢田の軌跡、その悩みや苦しみを細やかに描いた手法が成功している。時代の説明を思い切って省略しているのだが、沢田と同じ時代、同じ状況と一緒に生きた彼らの証言が、いやおうなく、沢田が生きた時代、沢田が生きた世界を生々しく浮かび上がらせる。

佐藤 忠男 ●映画評論家

田原 総一郎 ●ジャーナリスト



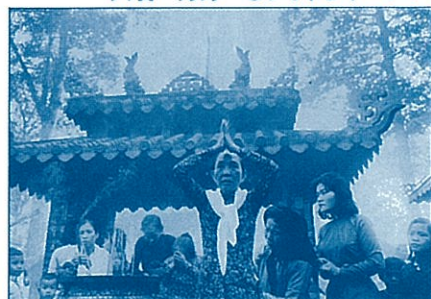
■戦争は、それだけを写しても、衝撃的な写真になる場合が多い。その中で「プロ」になる条件は、腰が座った写真を撮ることだ。さらに一枚一枚の写真に、迷いがほとんど見られないことだろう。沢田教一はその点、紛れもなく「プロ」だと思う。

過酷な戦場では冷静で鋭敏な判断が要される。彼は自分の視点を見失うことなく状況を把握し、的確に事実をカメラに納めた。

最前線で戦う兵士の、しかし紛れもない人間であることの苦悩……。同時に、村に住むベトナム人やカンボジア人の東の間の平和……。彼は、見逃すことなくフィルムに刻んだ。沢田教一の人間としての深みが、一瞬を普遍化させたことをこの映画は教えてくれた。

私はこの映画に5年間追いつけただけの重みを感じた。

大石 芳野 ●フォトジャーナリスト



まだ死ぬ準備ができておりませんし、まだまだこれからです。サタ殿

●トンキン湾事件発生。ジョンソン大統領は北ベトナムへの報復爆撃を命令
カメラマン岡村昭彦氏と出会う

●米軍の恒常的北ベトナム爆撃開始
UPIサイゴン支局に赴任
「安全への逃避」世界報道写真展でグランプリ受賞

「安全への逃避」がビュリツツアー賞授賞
●米軍の派兵が朝鮮戦争を上回る(32万8000人 10/3)

881高地の戦い・4月、コロラドII作戦・7月、875高地・11月、ブドフの戦い・12月など最前線で撮る
●米兵戦死者1万人を越える

●テト(旧正月)に北ベトナム・南ベトナム解放民族戦線が南ベトナムの主要都市を一斉攻撃
フエ王城の戦い撮る
●米・北第1回パリ会談
UPI香港支局員に赴任
●ホーチミン主席死去
●ソニミ村虐殺事件発覚

サイゴン支局に再赴任する
ブノバン支局長フランク・フロッシュとブノバン南・国道2号線上で射殺される

64

東京

65

サイゴン

66

67

68

香港

69

70

バン

●私は展覧会に出すための写真を撮りに行きますー沢田

●沢田にとってベトナムは日本を逃げ出すいい機会だったんだーキム・ウイレンソン(元UPI記者)

●いよいよという時になって(へり)に乗り込んで来たのが日本のカメラマンだった。ぶん殿ってやろうかと思ったよーエディ・アダムス(元APフォトグラファー)

●沢田は本当に競争心が強かった。僕に10日間もくらいついてきたんだーピーター・アーネット(元AP記者)

●沢田は写真が発展するのをわかっていて、それが彼のセンスだったーボブ・ケイラー(元UPI記者)

●戦争は人間にとって一番エキサイティングなものだーティム・ヘイジ(フリーランス・フォトグラファー)

●戦争が沢田に追いついたなどと思ったーダーク・ハルステッド(元UPIサイゴン支局長)

UPI: ユナイテッド・プレス・インターナショナル。UPIはAP(アソシエイトド・プレス)に対する通信社として1907年に設立された

沢田教一没後50年企画。24年振りに35mmフィルムでの貴重な上映!!

2020年11月3日[火・祝] → 11月15日[日]

東京都写真美術館ホールにて公開。*11月9日[月]は休映日となります。

タイムスケジュール 各回定員入替制/座席指定 ◎11月7日[土]13:30からはゲストを招いて特別シンポジウムを開催いたします。

10:30 13:00 15:30

*11月7日[土]13:00からの上映はありません 入場料1,000円[税込] (前売り券使用可能)

作品内容お問い合わせ先: 株式会社グループ現代 Tel: 03-3341-2863 協力: 青森県立美術館

前売り券 1,000円にてチケットぴあにて発売中。(インターネット、コンビニにてお買い求めいただけます)

当日一般1,500円[税込] シニア1,200円[税込] 学生、中学生以下1,000円[税込]

◎会場/お問い合わせ

東京都写真美術館ホール

Tel: 03-3280-0099 (代表) HP: www.topmuseum.jp

JR恵比寿駅東口改札より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分。恵比寿ガーデンプレイス内